

1) はじめに

森信三先生（1896～1992、日本教育界の父）の教えの一つ、「成形の功德」については25周年記念誌でご紹介しました。「すべて物事というものは、形を成さないことには、十分にその効果が現れないということです。同時にまた、仮に一応なりとも形をまとめておけば、よしそれがどんなにつまらぬと思われるようなものでも、それ相応の効用はあるものだということです」という教えです。

確かに、合気道開祖 植芝盛平先生（以下、開祖という）が語られたことが『合気道新聞』に載せられただけでは、「バラバラのままでは、そういつまでも保存するということは、実際問題としてはむずかし」く、「なるほど1年分12冊は揃っているが、しかし製本するというまではいかない場合と、ちゃんと表紙から目次までつけて、立派に製本しておくのでは、同じ雑誌でありながら、その実際に及ぼす効果は、決して同じではないわけです」との言葉の如く、これが『合気神髓』という形にしてまとめられていることで、後世の我々が、何度も読み直すことができ、少しなりとも「開祖の教え」について理解を深めることができます。

昭和58年（1983）に八千代市合気道同好会を立ち上げたことにより、正月に合気道本部道場で開かれる支部道場連絡会議に招待されるようになりました。その出席・欠席の返事をする紙に要望などの記入欄がありましたので、いつの時か、「開祖の教えをまとめた本を出して欲しい」ということを書かせていただきました。この願いが聞き届けられたのか、すでに準備されていたのか、記憶では、翌年、『合気神髓—合気道開祖・植芝盛平語録』が発刊されました。私としては、解説書が出ることを期待していましたが、「生前開祖が話しておられたことは、私にとっても難解であった」と植芝吉祥丸道主の「あとがき」があり、道話や道文を編集されただけのものでした。道主が難解とおっしゃられるのは謙遜としても、「この書を読まれる方々は、在来の知識で読もうとはされず、体全体で受けとめていかれることが肝要かと思われる」という奨めが付け加えられていました。体全体とは、稽古を通してということか、頭だけではなく全身全霊を傾けてということだと思います。それで、勢い込んで読み通しましたが、所々、独特の言葉が目にとまる程度でした。日頃鍛錬している技そのものの説明はなく、各章に付けられた題名「合気道は魂の学び」「合気とは愛気である」「合気は武産（たけむす）の現われ」「合気は息の妙用なり」「宇宙につながる合気」「合気とは禊（みそぎ）である」「神人合一の修行」を見ても、最初はすべて合気道の理念（あるいは哲学、神学、教学）について語られているのだと思いました。

ところが、25周年記念誌に載せるため『開祖の教え』としてまとめていると、理念だけではなく合気道の目的や理合（理法）についても触れられていることがぼんやりと浮かび上がってきました。その後、稽古の中でも工夫を重ねている内に、開祖の遺された言葉は、開祖が打ち立てられた「合気道」「武産合気」の理合や鍛錬法について明確に述べられていることが分かってきました。これも本にされた「成形の功德」の一つだと思います。

「古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよ」とは松尾芭蕉の言葉です。そこで、開祖の技を真似るだけでなく、開祖の求めたる所を求めるために、30周年記念誌の紙面を借りて、開祖が目指され、示された所を探ってみようと思います。

文章を短くするため断定的な表現をしますが、ここでの説明は（公財）合気会 本部道場や現道主の公式見解ではありません。本来、『私説 開祖の教え』と題すべきものですので、お気軽にお読み下さるようお願いしています。

25周年記念誌の記事をご覧いただき、「難しくてよく分かりません」というご感想もいただきました。それで、今回、できるだけ高校生にも分かる程度の平易な言葉遣いを心掛けますが、開祖が神道的な専門用語を駆使されて説明されているものですので、分からない時には**附表1**の『合気神髄』と『武産合気』の用語索引を使われて、原典もご参照下さい。

開祖の言葉は難解でも、伝えようとされている概念は明解です。この概念を示されるのに、表現を変え、いくつかの用語を使われています。例えば、「呼吸力」ですが（『合気神髄』『武産合気』にはこの言葉がありません）、「愛の念力」「阿吽の呼吸の理念力」「気魂力」「真理の力」「念彼観音力」などと表現されています。慣れてくれば、このことがかえって理解の助けになると思います。**附表1**の「同義語・関連語」の欄には、分かる範囲で別の表現を示しました。

繰り返しお断りしますが、ここで述べることは一つの仮説に過ぎません。私の理解が十分でないため間違いも多々あると思います。それで、後々の方に間違いを正し、より完全なものにして頂ければと願っていますが、これが、開祖の求めたる所を求める一つの足掛かりにでもなればこの上の幸せはありません。

2) あらまし

開祖が、それまでに習ってきた武術・武道を離れ合気道を創始されるようになった直接のきっかけは大本教（正式には「大本」）の出口王仁三郎（でぐち おにさぶろう）聖師との邂逅でした。王仁三郎聖師から「真の武は神国を守り、世界を安らげく、人類に平和をもたらすものである」と諭され、「武の道を天職とさだめ、その道をきわめることによって大宇宙の神・幽・現三界に自在に生きることじゃ」と行く道を示されます。

王仁三郎聖師の武道観により、開祖は、大東流の武田惣角師から徐々に離れるようになり、昭和6年（1931）に受けた指導を境に独自の道を歩むようになりました。

王仁三郎聖師とも昭和10年（1935）の第二次大本事件によって行き来が途絶えますが、このことによって中西光雲・（秋山）清雲夫妻と親しくなります。清雲は霊媒師（巫女）で、清雲に降る神懸りによって数々の神示（神旨、神託、靈示）を受けました。昭和15年（1940）12月14日の午前2時頃に受けた神示は、ご自身に神懸りがあったようですが、この神示（神の命）を受けたことによって「今まで習っていたところの技は、全部忘れてしまいました。あらためて先祖からの技をやらんならんことになりました」ということで、目に見える技の改良ではなく、根本理念や理合を神のみ心に合致させるべく全精力を傾けることになります。ここで言われる「先祖からの技」は、入身投げや四方投げなどという技では

なく、「修理固成（しゅうりこせい、<この漂へる国を>つくり固めなせ）」などと示されている神業（かみわざ、かむわざ）を指します。『古事記』では国生み・島生みの業ですが、合気道では地上天国建設のための武、武産の武、愛の武の技になります。

「真の」という意味は、「偽の」の反対語ではありません。「宇宙の真理そのものの」という意味です。開祖は、宇宙の真理が宗教の真理と同じであるという悟りを得られていますので、宗教の真理が述べられた『皇典（神典、神の仕組み・計画が述べられた書）古事記』に示されている概念（神のみ心）と一致した理合を持つ武道を創始され、それを「合気道」とか「武産合気」とされています。それ故、「合気道は古事記の営みである」とか「古典の古事記の実行が合気である」という開祖の言葉に繋がってきます。

『古事記』に立脚している概念はいくつかありますが、合気道の根本的な理合を示すもの、合気道のすべてを示すものが「天の浮橋」です。「天の浮橋に立つ」という言葉には、「呼吸力」という愛の念力（イメージの力）によって相手を自在に動かせる状態と、宇宙と一体となって相手を含めた宇宙と響き合うことにより、相手の打つ気・殺気（響き）を感じることができる察気の状態の二つの概念が含まれています。これらは、いずれも合気道の特徴づけるものです。

武道雑誌などで「大東流の合気」と「合気道の合気」という言葉が並べて使われていますが、私は、合気道では「合気道の合気」と言わず「呼吸力」と表現していて、異なる理合であると思っています。また、開祖が言われる「合気」は広い意味が含まれています。公開されている範囲で知る限り、「大東流の合気」は素晴らしいものだと思いますが、合気道とは念じているもの（イメージしているもの）が違っていると思います。

生前、開祖の演武は「(武道の) 真髓披露」と呼ばれていました。晩年は気の技が主体でしたので、触れないで相手が飛ぶのが気の技で、それが真髓だという捉え方もありますが、むしろ、相手が打とうとする気を察知して、それと同化する技が日本の武道に流れている真髓ではないかと思っています。

そのような意味で、「天の浮橋」の概念を二つに分けて、「呼吸力」は宇宙の宇（空間、上下四方）、響きを感じることは宙（時間、古往今来）に関連したものであるという観点から見て行きます。

開祖による『古事記』の概念は、王仁三郎聖師が口述した『靈界物語』の中の該当箇所とほぼ一致します。また、中西光雲（在野の古事記研究家、言霊学者でもあった）の布斗麻邇（ふとまに）言霊で解明した『古事記』ともほぼ一致しているはずですが、この光雲の『古事記』解釈については内容が分かりません。「布斗麻邇」は「言霊で示す神の真理」というような意味で、道文に「布斗麻邇古事記」という言葉が出ることから、そのように推測しています。『靈界物語』はネットで公開されていて、読みも解説もあり、用語検索も出来ますので、開祖の言葉を理解する助けになると思います。

合気道そのものは宗教とは切り離して教えられています。開祖が「自分とは何か、宇宙とは何か」という思索を重ねられて出来上がったもので、宗教的であり、哲学的であるとも言えます。宗教アレルギーの方も、『古事記』の解釈は国学というものにも根差してい

るので、受け入れる (approve) ことができなくても理解する(understand) ことはできると思います。知らなかったことが分かるようになるという喜びを持って取り組まれると、理解の眼が開けてくると思います。

ここでは深く触れませんが、合気道の目的は「地上天国建設」です。これも何か政治的意図があつてのものではなく、争う心を超越し、万有愛護の心で交わる場を作ることの意です（開祖は、それを言霊・気・響きで達成すると考えられていた）。開祖があつての合気道です。開祖の深い思索の結晶に触れるという畏敬の念と、感謝の気持ちで日々の稽古ができると、自ずと地上天国が形作られると思います。

3) 足がしびれる

開祖の稽古では、1時間の中に体操があつて、その後で30～40分のお話が続いたそうです。あまりにお話が長いので、足がしびれたとか、寒かったとかいう思い出が語られています。また、開祖に「今の技はどのようにされたのですか」と尋ねると、「つまりこうじゃ」と言って、別の技を示されたそうです。これらのことから、開祖は人に技が盗まれないようにされた、そのために技の稽古の時間が短かったということも聞かれます。

そのような受取り方は、熱心に開祖の技を盗み取ろうとする態度の現れだと思いますが、果たして開祖は本当に教えようとなさらなかったのでしょうか。

開祖は感受性の高かった方です。足がしびれて、早く稽古を始めてもらえないかと思っている人の気持ちは顔色や態度で十分認識されていたはずで、開祖から見れば、うんざりする程のそのような顔を見ながら、延々と話を続けられる他の理由があつたはずで、

時間を掛けて話された、また、話されることが何か奥深いものに基づいていたという感想から考えられる理由は、次のようなものではなかったかと思います。

- ① 話される内容がとても大切なことであつたから。
- ② 話される内容を会得されるのに、大きな犠牲や努力を払われたから。

実際、ある内弟子に対して次のように言われています。

「なぜこのわしの教えることを筆記しようとししないのだ。油断するな。君ら内弟子たる者が身近におつて、このわしの話や教えというものを書き残し、記録しなければ、将来と後世にこの植芝の教えや心というものを誰が伝えるのだ！ これからは努めて記録するように。それが必ず君らの修業の糧となるであろう。そして、君たちにおいては武術の修業ばかりでなく、油断なく古今の聖賢の教えを尋ね、努めて心の修業と養成を自己の成長に課することが大切である」

このことから、開祖は、「武術の稽古も大切だが、心（理念だけではなく人格形成）の修行がもっと大切である」と考えられていたことが分かります。

なお、このようなお話が主体の稽古になつたのは、戦後のある時期からだと思います。戦前、皇武館道場時代は地獄道場と呼ばれ、激しい稽古振りで有名でした。

4) 戦争も経験して

「① 話される内容がとても大切なことであつたから」という理由は、これが神から命じ

られて見出した「宇宙の真理」であるからということです。昭和 15 年（1940）の神示に続いて、武産合気の神示を昭和 17 年（1942）と 18 年（1943）に受け、「武産の武を法座を以て使命付けられてゐるものは汝一人以外に過去現在にない。この有難い使命を精神を以て達成する様努力を以て貫け」と命じられています。開祖が、本格的に「武産の武」の完成に向かわれるのは、この昭和 17 年（1942）からで、軍部のための公職を辞し、岩間（現、茨城県笠間市吉岡）に移住されてからのことです。

そして、終戦後の昭和 20 年（1945）に「武道の奥義も宗教と一つなのであると知って法悦の涙にむせんで泣いた」という経験をされます。戦争には反対であったという開祖が、東京（ではなかったが）空襲や原爆投下の洗礼を受けた敗戦後の日本を見て、一層、神の大愛を己が心とする、過去にも現在にもない武道、「武産の武（皆、空に愛の氣を生じて一切を抱擁する。之、武産なり）」を「真の武道」として確立することに心血を注がれたことは想像に難くないことです。

後年、「私は人間を相手にしていないのです。では誰を相手にしているのか。強いていえば神さまを相手にしているのです」（武産合気 p.74）と話されていますが、少なくとも昭和 15 年（1940）12 月 14 日の神示以降、禪（ふんどし）を締め直して神様を相手にされたことでしょう。

稽古の時に「ごめんなさい。昨日教えたのは間違えていました。夢で神様に怒られました」と言われたことがあったそうです。それで技を示されそうですが、どこがどう違うか分からなかったということです。これも技の手の回し方などの形が違っていたということではなく、心に何を想っているかというところが違っていたのだと思われませんが、このようなエピソードからも、開祖が神様を相手に研鑽されていたことが分かります。形ではなく心に想うことが変わったということは、次の言葉がそれを端的に表わしています。

「合気道は、周知のごとく年ごとに、ことごとく技が変わっていくのが本義である。私はその折り折りに各位に、道案内者として立ち、研究してゆくのである。そこで合気道は形はない。形はなく、すべて魂の学びである」（合気神髄 p.17）

開祖は、『古事記』に述べられた宗教の真理と、武道の稽古と思索から得られた宇宙の真理とが同じであるということに気づき、『古事記』の言葉や神名によって合気道とは何か、宇宙とは何か、人間とは何かということをお説かれます。その中心になる根本的なものが「天の浮橋」です。

この「天の浮橋に立つ」ということは、次に示す昭和 20 年（1945）の白い幽体との稽古の時の話に出て来る「天台」という言葉から、それ以前から感覚されていたようです。

「自己のうちに天台（天の浮橋のこと）をつくり、自分が天地と宇宙と常に交流するように心がけていた。それでもものをおこそうとする時、目の前に光りものの玉が現れ、その中に今一人の私（白い幽体）が立っている」（武産合気 pp.81-82、合気神髄 p.14 参照）

これから、「天の浮橋に立つ」ということは「宇宙と常に交流するように心がけ」るものであるということが分かります。心掛けるとは、そうありたいと思うことというよりも、天の浮橋に立つという様を「自分が天地、宇宙の一部で、その中心が自分の中心と一致している」と、ありありとイメージすることだと思えます。

また、うぶすなの社の構えも「天の浮橋に立つ」ということを表わしていると思います。

「右足国之常立神(女神)を中心にして始まります。左足を軽く天降りの第一歩として、左足を天、右足を地とつき、受けることになります。これが武産合気の『うぶすな(産土、ムスビの力を表す)』の社の構えであります」(合気神髓 p.69)

この構え(この場合、左半身)によって「勝速日の基、左右一つに業の実を生み出します」(合気神髓 p.70)ということです。白い幽体との稽古の時に開祖はこのような構えをされていたと思います。剣道で飛び込む時に足にためを作らないということと同じことの説明です。

5) 夜も眠らず

「② 話される内容を会得されるのに、大きな犠牲や努力を払われたから」という理由は、神から命じられて宇宙の真理を見出すまで、言うに言われぬ努力をされたからということです。開祖は、2時間睡眠であったと知らされています。午前2時まで禊などをされ、午前4時には起きられて東天を拝し、祝詞(のりと)を上げられる毎日でした。そのような時に「道統の起点」と呼ばれる次の神示を受けられています。

「昭和15年(1940)の12月14日、朝方2時頃に、急に妙な状態になりまして、禊からあがって、その折りに今まで習っていたところの技は、全部忘れてしまいました。あらためて先祖からの技をやらんならんことになりました」(合気神髓 p.23-24)

冬の寒い時に禊の後でということです。水垢離(みずごり)をされて真の武を求められる姿は、想像するだけでも身の引き締まる思いがします。

『合気神髓』の、この神示を受けられた時の文章の続きを読み進んで行くと、「この道は、天の浮橋に最初に立たなければならないのです。天の浮橋に立たねば合気は出て来ないのであります。(略)この合気も、また天の浮橋に立ちまして、そこから、ものが生まれてくる。これを武産合気といいます」(合気神髓 pp.26-27)に行き当たります。「天の浮橋に立たねば合気は出て来ない」と、ここで「天の浮橋」の重要性が述べられています。

「天の浮橋」は『古事記』に出て来るものですが、『古事記』からは「天の浮橋」以外に、「赤玉、白玉」「淡道之穂之狭別(あわじのほのさわけ)の行」「五伴緒(いつとものお)の緒力」「岩戸開き」「受霊(うけひ、古事記では誓約の意)」「小戸(おど)の神業(かむわざ)」「淤能碁呂島(おのころしま、おのごろしま)」「草薙(くさなぎ)の剣」「塩盈珠(しおみつのだま)、塩潤珠(しおひるのだま)」「修理固成」「高天原(たかあまはら)」「千引きの石(ちびきのいわ)」「比礼(ひれ)」「正勝、吾勝、勝速日」「みすまるの玉(五ほつ御統の玉)」「禊」「桃の実」「八尋殿(やひろどの)」などに加えたたくさんの神名(神名はそれぞれの働きを示す)が引用されています。

「一霊四魂三元八力の大元霊が、一つの大神の御姿である。大神は、一つであり宇宙に満ちみて生ける無限大の弥栄(いやさか)である。即ち天なく地なく宇宙もなく大虚空宇宙である。その大虚空に、ある時ポチ(ト)ひとつ忽然として現る。このポチこそ宇宙万有の根元なのである。そこで初め湯気、煙、霧よりも微細なる神明の気を放射して円形の圏を描き、ポチを包みて、始めてスの言霊が生まれた。これが宇宙の最初、霊界の初めで

あります。そこで宇内（うだい）は、自然と呼吸を始めた。神典には、数百億万年の昔とあります。そして、常在（すみきり）すみきらいつつ即ち一杯に呼吸しつつ成長してゆく。ゆくにしたがって声がでたのである。言霊がはじまったのである。キリストが『はじめに言葉ありき』といったその言葉がそれで、その言霊がスであります、これが言霊の始まりである（合気道新聞 第158号、合気神髄 pp.110-113）という開祖の語られる「天地剖判」の件（くだり）は『古事記序文』を発展させたもので、『霊界物語 73-1-1』に出ています。その元を辿れば、大石凝真素美の『大日本言霊』の次の文になると思います。

「それこの世の極元をス（漢字は素偏に氣を合わせたもの）という物が極乎恒々（すみきり）、至大浩々（ひろぎきり）て、自ずと十八稜図（75 声を表した図）の形を備えおり、漂いて深まりありつつ、恒々（つららぎ）たりつ。そのスという質（もの）を蒸気（ゆげ）よりも、煙よりも、香（きり）よりも、なお微細（こまか）なる神霊元子（こえのこ、言霊元子）が至大浩々（ひろぎきり）の域（ところ）に神集（かみつ）まりにつまりきりて、幾々（いくいく）却大約（おおつな）の昔より、生通しに生き居るもの也ける」

王仁三郎聖師は、国学を大本教に持ち込んでおり、その教えは古神道（復古神道、国学と結びついている）の流れを汲んでいます。その系譜を「合気道の精神的・霊的系譜」に示します。これから分かるように、開祖が宗教の真理と言われるものはでっち上げの突拍子もないものではありません。


中西光雲は在野の古事記研究家と言霊学者でもあります。開祖の三角、丸、四角の三元は、中西光雲からのようです。この三元と合気道の理合や動きとの関係をまとめるのに、戦後数年を要したのではないかと思います。「△○□が一体化して  となり、それが氣の流れとともに円転してスミキルのが合気道じゃ」と言われた、三角、丸、四角が融合したこの印は、中西光雲が深く関わった鈴鹿の椿大神社（つばきおおかみやしる）の交通安全のお守りのマークです（写真1）。



写真1 椿大神社の交通安全のお守り

「武産」は清雲に降った神示に現われた言葉で、『古事記』の「産巢日（むすび）」や『日本書紀』の「産霊（むすび）」から派生したものだと思います。また、この言葉の由来は、「速武産大神（はやたけむすのおおかみ）」だとも言われているそうです。「速武産大神」は「スの神」で、「スの神」は「天の村雲九鬼さむはら竜王（武産の神示を降した神）」でもあるので、「武産合気」と書いて「さむはら」とも読ませていたようですが、ここでは、

これ以上深く触れません。

この他に、「魂と魄」は中国の道教の思想で、「八識」は仏教の思想です。「空の気と真空の気」や「呼吸力」は開祖の造語だと思います。

開祖は、鎮魂行などによって気の力や霊力を高められたと思いますが、気という面でも深い造詣と実力があり、気の実践家からも崇敬の念を抱かれています。

このように、開祖は、単に『古事記』だけではなく多方面の知識を学ばれて、また、実践され、合気道（真の武）とは何かを伝えようとされました。このことに括目し、決して私たちが開祖の言葉を自分の知識や器だけで判断してはならないと思います。

6) ついに真の武を体得

合気道の紹介で、「(開祖が) その技術を磨き上げ、さらに人格的研鑽によって精神性、求道性をくわえ、“術” から“道” へと飛躍的に完成せしめたものです」という文章があります。この「人格的研鑽によって精神性、求道性をくわえ」がいつまで続いたかと調べてみると、昭和 25 年 (1950) までではなかったかと思えます。「“術” から“道” へと飛躍的に完成せしめた」というのは、真の合気の道を体得したという意味です。

開祖は、76 歳の時に「それが 7 年前、真の合気の道を体得し、『よし、この合気をもって地上天国を作ろう』と思い立ったのです」と話されています。これは、昭和 32 年 (1957) 8 月 25 日に印刷された『合気道』に、ある都内の新聞に載った座談記事として転載されています。満年齢だと、昭和 34 年 (1959) 12 月 14 日が 76 歳の誕生日になるので、これは数えて 76 歳のことだと思いますが、昭和 32 年 (1957) では、数えてもまだ 75 歳です。それで、これは開祖が年齢を 75 歳と言うべきところを 1 歳間違われたのだと思います。私など、よくあることです。

座談が昭和 32 年 (1957) のこととして、それから 7 年遡ると、昭和 25 年 (1950) になります。この年には、『合気道新聞』の前身である『合気会報』が発行され、「昭和 25、6 年 (1950、1951) ごろからたまたま各地に招かれて指導、演武、講演などにおもむくようになった」、昭和 27 年 (1962) には開祖が「この年の頃から東京、関西の各所で斯道の普及を大いにはかる」と年譜に記されています。この頃、「よし、この合気をもって地上天国を作ろう」と思い立たれたので、普及を図られるようになったのでしょう。

昭和 20 年 (1945) に「武道の奥義も宗教と一つなのであると知って法悦の涙にむせんで泣いた」という経験から 5 年の歳月が流れていますが、開祖の座学資料から伺い知ることが出来るような神学 (教学) を作り上げられるために費やされたのだと思います。その座学資料を、映画『合気道の王座』から写したものを **図 1** に示します。

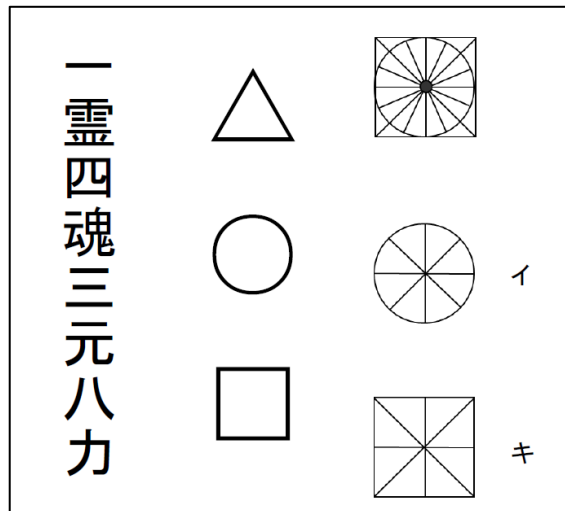


図1 座学資料 (映画『合気道の王座』より)

この座談記事によって、最初の神示から10年掛かって真の合気道の道を体得されたということが分かります。王仁三郎聖師の近侍になられてから30年です。座談記事では、「私にいわせれば、(合気道は) 真の武道ということができよう。というのは、宇宙の真理から出てきた武道だからです。そしてその宇宙は一つのものから分れてできていて、宇宙全体が一つの家族の様に和合し、平和の極地を表現しております。こうした宇宙観から出発している合気道は全く愛の武道でなければならないということです」と語られています(前述「天地剖判」参照)。

この座談で「我々は地上天国を作る使命を持って」と語られていることから、開祖の長々としたお話は、技を盗まれないためなどという皮相な理由ではなかったはずです。

真の武を体得された後も、「合気道とはわしのことじゃ」と言われたことから、真の合気道の道をさらに宇宙の真理(神のみ心)に近づけるため、神示を受け、万人と神の仲立ちとして、また、万人の案内者として立たれたのだと思います。開祖なくしては、真の合気道の道を伝える役目の人はいなかったのです。「武産の武を法座を以て使命付けられてゐるものは汝一人以外に過去現在にない。この有難い使命を精神を以て達成する様努力を以て貫け」と示されているとおりで、この開祖のおっしゃられている言葉は高慢でも何でもありません。

7) 合気道の初め

ここで、天の浮橋の読みですが、『霊界物語』には「あまのうきはし」とルビが振られている箇所もありますが、開祖は「あめのうきはし」です。「『ア』は自(おの)ずからに、『メ』は巡り」(合気神髄 p.50)と言霊で説明されています。音の上でも“A-ME-NO-U-KI-HA-SHI”なら“A-I-U-E-O”の五母音が揃って、天(ア)、火(イ)、結(ウ)、水(エ)、地(オ)がすべて入っています。「天地の和合を素直に受けたたとえ、これが天の浮橋です。片寄りがない分です」(合気神髄 p.69)と言われることとも感覚的に合うと思います。

開祖は、言霊学的にも感覚的にも、心を働かせて体を動かす合気道のすべてを「天の浮橋」に集約されています。

『武産合氣』の「合気道とは」に、次のとおり「天の浮橋」について述べられています。

「合気道はどうしても『天之浮橋に立たして』の天の浮橋に立たなければなりません。これは一番のもとの親様、大元霊、大神に帰一するために必要なのであります。またほかに何がなくとも、浮橋に立たねばならないのです」(武産合氣 p.29)

「天之浮橋に立たして」とは、「天之浮橋にお立ちになって」(尊敬語)という意味です。開祖は、『古事記』の「ここに天(あま)つ神、諸(もろもろ)の命(みこと)もちて、伊邪那岐命(いざなぎのみこと)、伊邪那美命(いざなみのみこと)、二柱(ふたはしら)の神に、この漂へる国を修め理(つく)り固め成せ、と詔(の)りて、天の沼矛(ぬぼこ)を賜ひて、言依(ことよ)さしたまひき。故(かれ)、二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛を指し下ろしてかきたまへば、しほこをろこをろにかき鳴して(海水をコロコロとかき鳴らして)引き上げたまふ時、その矛の末(さき)より垂(しただ)り落つるしほ、累(かさ)なり積もりて島と成りき。これ淤能碁呂(おのごろ)嶋なり。その嶋に天降(あも)りまして、天の御柱を見立て、八尋殿(やひろどの)を見立てたまひき」から引かれて、お話をされています。

『合気神髓』でも同じことが述べられています。

「この道は、天の浮橋に最初に立たなければならないのです。天の浮橋に立たねば合気は出て来ないのであります。(略)この合気も、また天の浮橋に立ちまして、そこからものが生れてくる。これを武産合気といいます。(略)言霊とはひびきですから、宇宙のひびきをことごとく身の内に受け止めるのです。それで霊界(目に見えない世界・もの)をこの人(自分)の鏡(心)に写しとる」(合気神髓 pp.26-27)

合気道を始めようになると最初にしなければならないということから、「茲(ここ)に合気の道を愛究される誠友は先ず真空の気(宇宙に充滿している気)と、空の気(五体は空の気で働く、五体が立ってられるように五体の周りを出ていて引力を与える縄のような働きをする気)を、性(さが)と業とに結び合い、喰入りながら業の上に科学以て錬磨するのが修行の順序であります」(合気道新聞 創刊号)を思い起こします。

道歌にも「むらきもの我鍛えんと浮橋に むすぶ真空 神のめぐみに」があります。天の浮橋に立つとは、天地(真空の気)と一体になるということです。「天地と一体になるには天の浮橋に立たなくてははいけません。天の浮橋に立つには座っていてもできますから・・・」と開祖が説明されていますが、まず体軸(正中軸)を垂直にし、肩や膝の力を抜くことから始めるのが良いと思います。外から見える姿勢がこのようになると同時に、自分の中心(臍下丹田)が天地(宇宙)の中心と一体になっているとイメージします。そこに自分と相手の区別がなく、宇宙だけがあるとイメージするのです。そうすると、次のようになります。

「すなわち常に勝っている境地です。相手に対して、勝つか負けるか、などということはないんです。それだから、合気道においては常に相手がなく、相手があっても、それは自分と一体になっていて、自在に動かせる相手なのです」という状態で稽古が出来るようになります。

この「自在に動かせる」という表現は、正しく呼吸力を働かせている状態です。この時

に「合気道は手を見てはいけない。相手を見る必要もありません（手を動かすことによって相手が動くと思って、相手がどう動いているかを見てはならないという意）。姿を見る必要もありません。ものを見る必要もありません」（合気神髄 p.27）と教えられていることも大切です。相手を見て相手との接触点に力を加えては、相手は動かないのです。接触点での力のやり取りをせず、一度、相手に任せ、無抵抗になることが「万有愛護」に通じます。これだけでは呼吸力を発揮出来ないかもしれませんが、取りあえず天の浮橋に立つということが合気道の理念について述べているものではなく、根本的な理合について説明されているらしいということが分かるだけで結構です。

「宇宙の真理のごとくは技に表すことができます」（合気神髄 p.181）と言われるとおりで、宇宙の真理が合気道の技の根本的な理合になっています。

現在の合気道は、誰にでも出来るようになっていて、そのお蔭で間口が広がっています。合気道を始めて、受身が取れるようになったら、基本技の稽古をし、次に多様な技を習得する喜びがあります。初段～三段位になると、一通りの技が出来るようになります。そうすると、次にはもっと上手に、もっと力を使わずに、ということに関心が向くと思います。この時からでも遅くはないと思いますが、開祖は、「この道は、天の浮橋に最初に立たなければならぬのです。天の浮橋に立たねば合気は出て来ないのであります」とおっしゃられています。基本技は基本的な動きというよりも、基本的（根本的）な理合を習得する技であるということでしょうか。出来る出来ないから言えば、最初は出来ませんが、出来るようになると思って最初から理合の稽古をするのが良いとおっしゃられているようです。

8) 合気道を卒業

「この山彦の道がわかれば合気は卒業であります」（合気神髄 p.182）とされています。道歌の「天地人 和楽の道の合気道 大海原に行けるやまびこ」が、その前に書かれています。これと「日地月 合気になり橋の上 大海原は山彦の道」が関連していて、天の浮橋に立つと山彦の道が分かるということが詠われていることが分かります。

響きを感じる事が山彦の道であると理解すると、次の道文のように相手の打とうとする気を感じる（感応による察気）ようになれば、合気道は卒業の域に達したということになります。

「相手が歩いてくる。相手を見るのじゃない。ひびきによって全部読みとってしまう。（略）合気は相手がきたらスパークといく。今ここに相手がくる。坐って立とうとすると必ず分かる」（合気神髄 p.119）

「言霊とはひびきですから、宇宙のひびきをことごとく身の内に受け止めるのです。それで霊界をこの人の鏡に写しとる」（合気神髄 p. 27）

そうすると、『天の浮橋に立つ』は合気道の初め（呼吸力）と終わり（察気）、即ち合気道全体の概念を示すものであることが分かると思います。なるほど、「合気道は古事記の営みである」と言われるとおりでありますが、察気の場合、時間的に過去・現在・未来の真ん中に居るというイメージを持って立つのだと思います。

目が相手の動きを映し取ってそれが脳に伝達されるまでに 0.5 秒、脳から手足に命令が届くまで更に時間が掛かるそうです。居合の達人であれば 0.2 秒で抜刀して斬り付けるこ

とが出来るとは、相手の動きを目で追っているだけでは、避けられずに斬られてしまうことになるでしょう。相手の動きが始まる前の、相手が「位置に付いて、用意、ドン」を心の中で行っている時に、それを響きによって全部読み取ってしまうという察気は、すべての武道家が出来るとはではありません。これが出来るとなると合気道は卒業だということですが、かなりの難度だと思えます。

「(天の浮橋に) 立ったならば自分が統一していなければなりません。空気を媒介として統一になるのです。呼吸 (いき) です。人の身体に、過、現、未の全部をひきしめてしまうのです」(合気神髄 p.101) と述べられているところから、これを察気のことだと推測しました。これを「ゾーン」や「フロー」という現象や状態と捉えると、修得の道が開けるかもしれません。「ゾーン」と「フロー」については、後で詳しく述べます。

改めて『合気神髄』と『武産合気』に出てくる言葉の頻度を数えて、頁数で示すと、「天の浮橋」(46) は、「武産合気」(42)、「正勝・吾勝・勝速日」(23) よりも多く、「宇宙の真理 (宇宙の真象、宇宙の神髄なども含む)」(48) に匹敵する数です。言葉そのものは、「魂 (こん、たましい)」(97)、「禊」(61)、「気」(58)、「和合」(57)、「光・熱・力」(54)、「愛」(53)、「言霊」(40)、「顕幽神 (顕界・幽界・神界)」(34) など、「天の浮橋」より多いものもありますが、これらはすべて「天の浮橋」に関連付けることが出来る言葉です。

頁数には若干見落としがあるかもしれませんが、「天の浮橋」、「正勝・吾勝・勝速日」、「禊」など『古事記』由来の言葉が多く、「つまり古典の古事記の実行が合気である」(合気神髄 p.19) という開祖の言葉を裏付けるものとなっています。

開祖が、「合気道技は手取り足取り教えてしまうと凝り固まったものになり個性がなくなってしまうので、自分なりの技を試行錯誤しながら磨くもので、私があなた達の発想を阻害したくないからだ」と言われています。自由に発想して自得するという努力を求められているわけですが、「発想」という言葉に着目すると、同じ動きをしてもそれぞれがイメージしていることは幅が広いので、自由にイメージして自得しなさいと理解することも出来ます。より高い真理 (イメージ) とは何だろうか、日々、思索し、人間的により高いレベルのイメージで行う技を試行錯誤することも合気道の卒業のためには必要なようです。敵の命を奪おうとイメージするのと敵にも命を与えようとしてイメージするのでは、どちらがより高いか、より真理に近いかを考えることは有益です。

私は、天の浮橋というと、昔見た『日本誕生』という映画にあった虹 (天空橋) のようなものをイメージしたり、百人一首から雲の通り道をイメージしてみたりしましたが、今は宇宙の中心 (空間の中心ですが) に居ることをイメージしています。ここで述べたように、開祖は、時間 (過去・現在・未来) の中心もイメージされたようで、それが察気に欠かせないと思えますので、それがどのようなものか、考えを巡らせている段階です。

合気道には、古武道のような極意の皆伝や相伝のようなものがないのは、開祖が神示によって武道の極意に導かれたという背景もあってのことだと思います。したがって、後進には、神示とまでは行かなくてもインスピレーション (靈感、閃き) を求められるのだと思います。神示を受けることにより、この真の武は引き継がれて行くと、開祖は考えられていたように思います。

9) 合気道の根本

『天の浮橋』が合気道の根本的理合を示すものであるという考えを述べましたが、この根本が大変重要なことなので、開祖は、天の浮橋に立った時の状態を道文のあちこちで他の言葉を使っても表現されています。これによって、イメージに幅が出てきます。開祖の多様な言葉遣いのそれぞれの意味を知ることが大切ですが、それらの言葉から何をイメージするかで、何よりも合気道の稽古の質が違ってくるはずで

「合気道はどうしても『天之浮橋に立たして』の天の浮橋に立たなければなりません…」(武産合気 p.29) の後に、「一番の神業 (かむわざ) は、大神にして創造主 (つくりぬし) たる神に同化、帰一和合すること、つまりその方法は与えられたつとめを尽くすこと、精霊のご神霊にむすんでゆくことである。大宇宙に同化することになるのであります」(武産合気 p.29) と続いています。したがって、この文章も天の浮橋に立った状態を説明するものです。

「帰一和合」と同じ意味で、「神人合一」「神人和合」「神人一体」「心身一如」「心身統一」「身心統一」「身心一致」「精神統一」「霊体統一」「我は即ち宇宙」などが使われています。これは神懸かり (トランス状態) を言っているのではありません。瞑想状態 (目をつむって何も考えない状態) でもありません。稽古中に宇宙の中心と自分の中心が一致している様子をイメージすること、自分が意識出来る空間及び時間の中心に自分が立っている様子をイメージすることだと思えます。

「植芝は植芝自身にきき、そして知ったのであります。この私の中に宇宙があるのであります。すべてがあるのであります。宇宙が自分なのであります。宇宙そのものでありますから、自分もないのであります。また自分が宇宙であるから自分一人のみがあるのであります」(武産合気 pp.35-36) と言われる言葉を哲学的又は宗教的な概念だと考えないで、武道の中に生かすためには何よりもイメージを沸かすことだと思えます。

「天の浮橋に立った折りには、自分の想念を天にも偏せず、地にも執 (つ) かず、天と地との真中に立って大神様のみ心にむすぶ信念むすびによって進まなければなりません」(武産合気 p.72) でも「想念」「信念」という言葉で強調されています。

そうするとき宗教の「神人合一して茲 (ここ) に無限の権力を発揮す」(大本教旨) という言葉が、合気道ではまず呼吸力の発揮を表す言葉になってくるのではないのでしょうか。

「大神様のみ心」から「万有愛護」、「与えられたつとめ」から伊耶那岐・伊耶那美の神に与えられた務め「修理固成 (修め理り固め成せ、創造せよ)」という言葉も思い浮かびます。

宇宙の中心という感覚から、「皆空 (みなくう) の中心」に至ります。

「念を去って皆空の気にかえれば生滅を超越した皆空の御中心に立ちます。これが『武道の奥義』であります」(合気神髄 p.80)

これは奥義ということですから難しいかもしれませんが、イメージとしては、「宇宙そのものでありますから、自分もないのであります」という感覚です。相手が向かって来た時、手や指先、又はお臍辺りで受け止めようとせず、しっかりと宇宙の中心である臍下丹田に

まで迎え入れて上げるイメージです。新陰流兵法宗家であった柳生延春先生の言葉では「さあ、いらっしやい」です。このような言葉を心の中でつぶやく時に心に浮かべるイメージです。中心まで迎え入れることで「万有愛護」の心が一層大きくなります。

「円を描く、円の中心を知る。円の中心こそ…。それを愛の教育に移すのです」（合気神髄 p.100）という言葉も味わって下さい。このことは、合気道が「引力の練磨」であるということにも繋がります。

「自分自身が魂の錬成をして自分が地球を一呑みにするような、立った姿にならなければなりません。自分に与えられた引力の鍛練によって、それが出来るはずです」（合気神髄 p.101）

「引力の鍛練（引力の働き）」は「皆空（何も無いのではなく、空間が有ること。虚空の中心）」と同じイメージです。

この中心感覚から「摩擦連行作用、摩擦作用」が生まれます。

「右に螺旋して舞い昇りたまひ、左に螺旋して舞い降りたまふ御行為により、水火の精台（天の浮橋）の生ずる摩擦連行の、様相根元をなし、無量無辺の音声、万物一切は成立するということでありませう」（合気神髄 p.77）

摩擦は分かっても連行作用という言葉が分からないのではないかと思います。これは科学的な言葉で、水道の蛇口を捻って水を出し、スプーンの背の方（凸部）を近づけると、スプーンが水の流れに引き寄せられる作用などを連行作用と言っています。「舞い昇り」「舞い降る」と水道の水の流れを連結させると、イメージしやすくなるかもしれません。

これも呼吸力や結びに繋がる言葉だと思えます。

「すみきり」という言葉も、「常在（すみきり）」「澄みきり」などと書かれますが、これも天の浮橋に立った状態を表す言葉です。元は『古事記』の言葉なので、合気道とどのように結びつくか理解するのは難しいかもしれません。

「常在」も「澄みきり」も、「自分の想念を天にも偏せず、地にも執かず」という意味です。『霊界物語 73-1-1』には「清朗無比にして、澄切り澄きらひスースースースーと四方八方に限りなく、極みなく伸び拡がり膨れ上り、遂にス（愛）は極度に達してウの言霊（結び）を発生せり」と書かれています。

このことから「常在」とも書かれます。王仁三郎聖師は、『古事記』に所謂（いわゆる）『独神成坐而（すになりまして、本居宣長は『古事記傳』で“ひとりがみとなりまして”と読ませている）、隠身也（すみきりなり、宣長は“みみ〈御身〉ををかくしたまひき”）』とある通り、聖眼、之を視る能わず、賢口、之を語る能わざる境涯である。不生不滅、不増不減、至大無外、至小無内の極徳を發揮されて居る」（大本略義）と説き、『至大無外（しだいそとなし、無限大）、至小無内（ししょううちなし、無限小）』を表すとしています。自分の中心が臍下丹田だけでなく宇宙に遍満して存在している状態です。

このことをイメージすると、離れていても相手が動いてくれるようになるようです。

大本系の生長の家の教えでは、「神の生命唯獨り輝き渡る絶対境である。すみきりであり、すべてである。彼があり、我があり、そのままに彼と我とはひとつの“すみきり”である。絶対境への“すみきり”である。大生命へのすみきりである。そして、すべての生ききり（生き通し）である。花咲くすべての生ききりである。鳥啼くすべての生ききりである。

個即全、全即個、相即相入重々無礙、この生命の発現が神想観である」と説かれています。「彼があり、我があり、そのままに彼と我とはひとつの“すみきり”ということで、比較的イメージしやすいと思います。

王仁三郎聖師は、「言霊解では、住み極る（すみきる）と読み、過去、現在、未来に一貫して常住され、無限絶対無始無終（極みない）であられる主神（スの神）のご神徳の形容である」と示されています。

このことから、「すみきり」に漢字を当てれば「常在」「常住」となります。「おのころに常立なして中に生く 愛の構えは山びこの道」の「常立（とこたち）」も同じ意味で、上下四方に偏満し、古往今来（過去・現在・未来）を一つに引き締めて存在している様を表わしていて、この道歌もまた天の浮橋に立った時の状態を詠ったものです。

「独楽はな、高速で円転するほど中心軸が安定し、静止しているかの様に見えるものじゃ。心身五体五感の作動も又同じ。この境地を『スミキリ（澄み切り）』と言う。（大正～昭和初期、独楽に喩えて常住平常心を説き、合気道特有の「中心の確立による円転の理」を示した）」（合気道探究 第5号 p.2）と開祖が説かれています。開祖の「天の浮橋」は「天運循環」と説明されていますので、独楽の回転や舞い上がり舞い下がりイメージされていたのではないかと思います。稽古の中では自分の中心が宇宙に遍満して存在している状態をイメージすると良いと思います。

「天の浮橋をもう一度繰り返しておきます。天の浮橋とは幽遠微妙の理と経綸をいうのであります。その真人の、言行心の上がすでに天の浮橋であり。いいかえれば、その真人の魂の動き、および御姿、御振舞い、そのものがすでに天の浮橋でありまして、高遠なる愛の動き、すなわち宇宙の真の頭、およびスとウの働きによってウは働きを二つに分け、靈魂と物質よりなるところの、交流、無限大に、至大無外（しだいそとなし）、至小無内（ししょううちなし）に修理固成の経綸として、やむことなき建国の完成に進む私達に対する大橋であります」（合気神髄 pp.71-72）

これらの他にも「高天原（大宇宙）」「和と統一」「大常の神（万物の神）」など、「天の浮橋」を表現し関連した言葉が出ています。そのようなことから、「天の浮橋」は合気道の根本的な理合、合気道そのもの（「教えの中心」合気神髄 p.28、「これ合気なり」合気神髄 p.90 参照）を表した言葉であることが分かります。

10) 天の浮橋に立つための気の鍛錬

天の浮橋に立つための鍛錬法があります。開祖の鍛錬法からご紹介します。

天の浮橋に立つという状態に至る鍛錬法を思い巡らすと、心、体、気の「三つの鍛錬」（合気神髄 p.177）の「気の鍛錬」と「心の鍛錬」がそれではないかと思います。また、「天ノ浮橋とは火（霊、心）と水（身、体）の交流である」という言葉から、体の鍛錬法もあると思います。

まず、気の鍛錬によって、気のエネルギーを高めておく必要がありますが、武道の稽古をしている人は、結構、気のエネルギーが高くなっていますので、修得が早いと思います。

気は脳波とも関係があり、医者や科学者は脳波測定をして研究しています。気は、脳波が α （アルファ）波の時によく出ます。

まず、『月刊武道』（2013年2月号「脳を活性化する」）に東邦大学医学部の有田秀穂教授が、「最適な覚醒状態」についての記事を書かれているので引用します。この方は、日本におけるセロトニン研究の第一人者です。

「他方、ゾーンという特殊な覚醒状態がアスリートによって体験されることがある。リラックスしているのだけれども、ものすごく集中している。平常心が維持出来て、異常な緊張も、無用な不安もない。心と体が完全に一体化していて、自然に体が動いているように感じる。これが、『最適な覚醒状態』の極まった状況といえる」

「平常心是道（びょうじょうしんこれどう）」「リラックス」「心身統一」など、我々にも聞き慣れた言葉と同じような言葉が出てきます。これらの言葉は「天の浮橋に立つ」状態を言っています。

「ゾーン」は、昔、巨人軍の川上哲治選手や世界のホームラン王の王貞治選手が「ボールが止まって見える」とか「ボールの縫い目が見える」と言い、近年ではイチロー選手が「本当にボールが止まって見える」と言った時の感覚を表すスポーツ心理学の用語です。

この感覚は、開祖の「ひびきによって全部読みとってしまう」ということと同じことだと思えます。

「医学では脳の覚醒状態をどのようにして評価するか。昔から知られている方法は、脳波測定である。目を開けて覚醒している時には β （ベータ）波が発現し、目を閉じると α （アルファ）波に変化し、閉眼し続けると、やがて α 波から θ （シータ）波に徐々に変わり、ウトウトとした眠気が感じられるようになる。姿勢も維持出来なくなり、意識が遠くなり、人は睡眠状態に入る。この時には脳波は δ （デルタ）波が中心になる。このように意識状態は脳波によって客観的に評価できる」

「最適な覚醒状態」の時に発現する脳波は $\alpha 2$ 波（ミッドアルファ波 mid-range alfa wave）です。 α 波は、 $\alpha 1$ 波（ファーストアルファ波 fast alfa wave）、 $\alpha 2$ 波、 $\alpha 3$ 波（スローアルファ波 slow alfa wave）に分けられ、周波数はそれぞれ11~13 Hz、9~11 Hz、7~9 Hzです。

「脳波が $\alpha 2$ 波の時には、通常の覚醒における β 波の状態ではなく、少し大脳皮質の活動が抑制されている、とはいっても、眼をつぶっているほどの抑制ではない。即ち、“リラックスした覚醒状態”、ここがポイントである。大脳皮質の認知機能が少し抑制され、意図的に身体をコントロールしようという働きが抑えられている。それはゾーンにおける自然に身体が動く体験に通じる。決して意図しているわけではないにもかかわらず、良いパフォーマンスが自然に出来る。それがセロトニン神経の活性化によって $\alpha 2$ 波が出ている状態である。『最適な覚醒状態』の極まった状況といえる。弓聖・阿波研造師範のいう『それが射る』の状況である」

「天の浮橋」に立つことも脳波で表現すると、 $\alpha 2$ 波が発現している状態といえるのではないのでしょうか。結果的にかもしれませんが、そのような脳波が出るようになるための鍛練法が気の鍛練です。

トップアスリートでは、バスケットボールのマイケル・ジョーダンが、ゾーンに入る経験を何度もして、Michael Jordan gets in the zone. (マイケル・ジョーダンがゾーン状態に入る) という言葉がある程です。彼は、「試合中に周りの音が聞こえなくなり、自分の実力がフルに発揮出来る精神状態、具体的にいうと、自分の周囲の動きが全部スローモーションのように見える。つまり、相手のディフェンスがゆっくりと動いているように見えるので、当然、そのディフェンスを軽く抜くことができる」と、その体験を語っています。

開祖の場合のピストルの弾を避けたという話と似ています。開祖は、それを気で説明されていますが、このゾーンに入るという面からアプローチすると、その状態に到達するための鍛錬法が理解しやすくなると思います。

さて、それでは気の鍛錬法（修法）に分類されるものから入りましょう。脳波を $\alpha 2$ 波（ミッドアルファ波）の状態に導く鍛錬法と云えば、直ぐ座禅を思い浮かべますが、開祖は、座禅は奨められていません。「座禅を行ってみましょう。鎮魂帰神の方法は正坐と中坐（両膝をついて爪先を立てた状態）にあります…」（合気神髄 p.126）とされていますが、鎮魂帰神のことを座禅と分かりやすい言葉でおっしゃられているだけのようです。

開祖が、初めて鎮魂帰神に出遭われたのは、「さて、（綾部にある大本教の）本部で、危篤の父の平癒をお祈りしていただきたいむねを告げると、金竜殿に通されて、しばらく鎮魂祈念するようにと助言された。端座瞑目し、かつて習いおぼえた密教加持の印行をおこなって…」と述べられている、大正8年（1919）12月、大本教の聖地、綾部に王仁三郎聖師を訪ねた時のことです。大本教の鎮魂印は密教の九字の印（獨古印、臨）に似ています。

開祖が入られた頃の大本では、神懸りとしての鎮魂帰神を行っていましたが、大正10年（1921）の第一次大本事件の後に止めています。しかし、大正13年（1914）の入蒙の折に開祖が鎮魂印を結んでいる写真（写真2）が残っているので、鎮魂（心身統一）のためにその後も行として続けられていたのではないのでしょうか。神懸り状態になる霊媒としてというよりも霊力を出すためだったと思います。



写真2 鎮魂印を結ぶ開祖

開祖は、「私は神懸りとは違う。神そのものなのです」（武産合気 p.189）とおっしゃら

れていたもので、神懸かり状態（トランス状態）も体験されていたと思います。その上で「神懸り（帰神）とは違う」と言われているようです。年譜には次のように書かれています。

「大正 9 年（1920） 王仁三郎師の絶大なる信頼を受けて片腕となり、鎮魂帰神その他の幽斎修行、および顕斎修行につとめた」

なお、片腕というのは、近侍として王仁三郎聖師の傍に仕えたということで、最高幹部や、当時、一流の来客との座談のおり同席させられ、それがこの後、各界の著名人との繋がりに発展します。このことは、30 歳代の開祖の人間性に影響を与え、向上させるためにも役立ったと思います。

このように、開祖は、神懸りとこのゾーンに入った状態とは区別されていたようです。開祖が続けられた方法は、鎮魂印を組み、念（イメージ、意念）を廻らせる方法のようです。

「それには、まず鎮魂帰神の神習いにて神術によって心を練るべし」（合気神髄 p.168）

「（鎮魂帰神の）方法は合気の修練の折に指導者によって学んで下さい。（略）正坐をやってみましょう。心で鼻の奥を眺め、へその緒まで通す。ひびきで開く。宇宙の営みの世界を感じ見る。…修法は、（鎮魂印の形に）指を結び目をつぶって下さい」（合気神髄 p.127）

ここで「目をつぶり」と教えられていますが、確かに目を閉じると数分で α 波になりますが目を開けたとたんに消えてしまうので、私の考えですが、武道やスポーツに生かそうとすると瞑目法は向いていないと思います。武道では、座禅で行われている半眼よりも剣道の遠山の目付けのように宇宙を感じ見るような目付きが良いのではないのでしょうか。

なお、脳の働きであっても、「へその緒まで通す」と教えられているように、心は頭ではなく腹にあるとイメージするのが、腹が据わって、 α 波が発現し易くなります。

「その結びは中心がなければなりません。中心があるから動きが行われるのです。この中心は腹です」（合気神髄 p.68）

トランス状態でも α 波から θ 波が現れるそうです。また、催眠術をかける時には θ 波の状態にしておいてかけるそうです。それで、あまり結果を求めて気功などを行うと、トランス状態（脱魂状態）の方に行ってしまうってコントロールが効かなくなることがあるかもしれません。そのため、専門家の下で修練をされるのが良いと思います。

私たちが勝手にやって、低級霊に憑かれて気でも狂（ふ）れたら大変です。この修法は、人を簡単に投げ飛ばしたいなどという自分の利益を考えず、常に禅でいう衆生済度の大発願、合気道の万有愛護の大精神に基づいて修するという気持ちが求められると思います。

脳波で見ているこの領域は潜在意識や超意識という捉え方もされていて、人間は潜在意識や超意識の世界で繋がっているということがいわれています（開祖も「八識」に触れられています）。開祖の次の言葉は、開祖がそのような状態にいたということを示したものだと思います。

「魄（物質的なもの）の上からもテレビのようなものができ、遠隔の地の出来事も見えるようになった。それが一步前進して精神の花が咲き、実が結ばれた折りは、人は互いに個々の想いが絵のように自己に映って、すべてが分かるようになる」（合気神髄 p.15）

これは、まさに察気の説明です。

気の鍛錬法として、開祖が「ひびき」と言われているように、声を出すのも良いようです。江戸時代後期の剣客 白井亨の場合は徳本行者に参じて念仏を唱え、心境が進みましたが、開祖の場合は次のように祝詞や「アオウエイの五音」ではなかったかと思います。

「祈りは、本当に祈りが素に成り大橋となる。大橋というのは、天の浮橋の事である。天の浮橋とは、火と水の十字の姿である。世界十字に引き均（なら）して、世を治めるといふ御神示がここに有る」（武産合気 p.48）

「天台（天の浮橋）に立って、東天に向かって礼拝する。地球の中心に立って、天地万有万真（万神か？）と共に、打揃って、そして感謝を捧げる祈りである。これが真の合気道であり、武産である。これがごく調和のとれた水火の息と息との交流の根元をなしているのである」（武産合気 pp. 50-51）

「朝、東天を拝し、宇宙の妙精を呼吸によって吸収し、祈り言を唱えれば、身心は爽快になって邪気は晴れる。（略）この祈り、みそぎによって、鎮魂帰神も成り立つのである」（武産合気 p.64）などの言葉から、それが分かります。

その他にも気功（〇〇呼吸法、〇〇静座法）、ヨーガなども同じ鍛錬法です。これらでは胎息（無呼吸に近い呼吸）が理想だと言われていますが、武道ではもっと空手の息吹の呼吸法のようにひびきがあった方が良いと思います。目を開き、息（と一緒に気）を吐き、吸うこと、イメージで気をめぐらせること、ひびき（呼吸する時に声などを出して）があること、そして、リズムカルな動きが伴うものが良いと思います。

有田教授は、「リズム運動をするときに、自分が動かしている体のみを意識することで、脳内では脳が変わっていきます。体のみを意識しながらリズムカルに腹筋を使う呼吸法を5分もすると、脳波に影響が現れるのです。（略）5分程度呼吸法を継続していくと、ほとんどの被験者の脳波にα波（8～13ヘルツ）が出てきます。（略）そして、この脳波をコンピュータで1分ごとに解析してみると、開始約5分後からα波の山がはっきりしてきて、次第に山が高くなり、10～15分でピークに達します。そして20分を経過するころから、α波の山は上がったり下がったりと不安定になります。（略）もちろん個人差があり、呼吸法を普段から実行している被験者は30分程度までは不安定になりません」と説明しています。このことから、この修法は2、30分位続けると丁度良いことが分かります（**図2** 参照）。

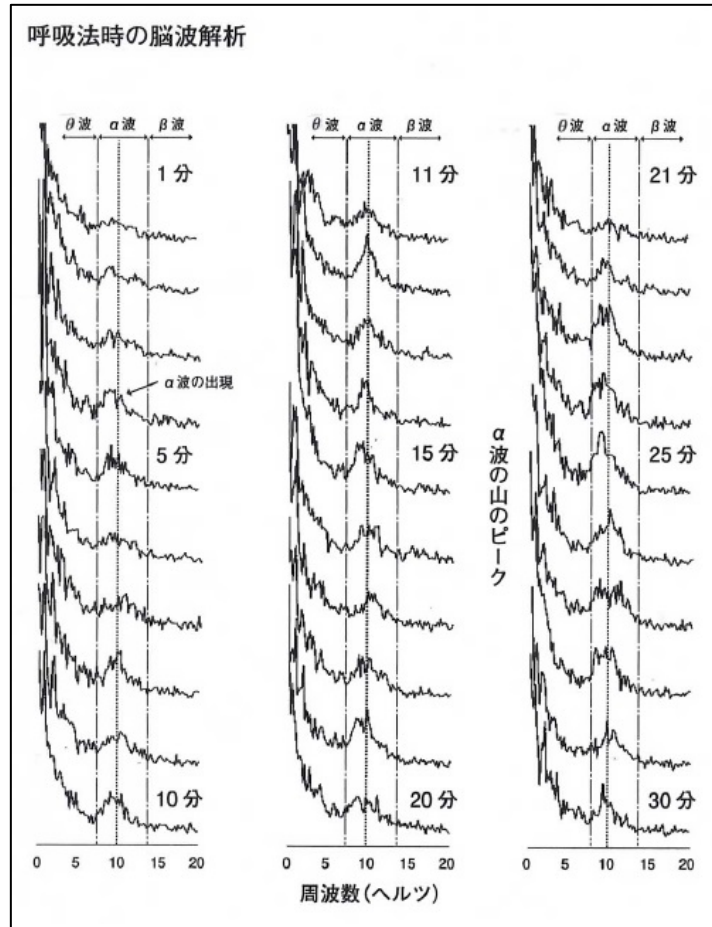


図2 呼吸法時の脳波解析 (『「セロトニン脳」健康法』より)

なお、目を閉じて15分位でα波が出ますが、眠くなる一歩手前の脳波になり、周波数が少し違ったものだそうですので、ゾーンに入れるものではありません。

開祖は、鎮魂帰神法他に、天の鳥船の行(船漕ぎ運動)、振魂も奨められています。これなどは、ひびき(声)もリズムカルな動きも伴うものです。開祖は、「天の鳥船(あめのとりふね)の行の神事あり。之は神々が、天の鳥船に乗り給いて大海原を横ぎり給いし大雄円をしのびつつ渾身、特に臍の辺りに力をこめ気合と共に櫓を漕ぐままの動作を百千回反復する行にして、運動それ自身にあたいするのみならず、之に依りて合気の稽古も出来不智不識の間に衆心の一和する禊なり」(武道禊の巻)と伝書として遺されています。

『古神道入門』を著されている小林美元師は、「宇宙の波動に共振する、振魂と天の鳥船の神伝の禊の行法が、靈感を高めます。一度や二度でなく継続が、力になるんですよ」と教えています。

これら以外に、開祖は、滝行、日想観などもされています。

これらの鍛練法を繰り返し、ある域に達すると、簡単にα波が出るようになります(気が出るようになります)。開祖が行われた神楽舞は、この宇宙と一体になるための行(儀式)であったと聞いていますが、気を会得された後、簡単にα波を出すためのスイッチを入れ

る働きがあったのではないかと思います。

神社などで行われている神楽舞は、神話や神社縁起を表したものですが、開祖の神楽舞は『天神楽（あめのかぐら）』とあって、天の浮橋に立って国生み・島生みをする所作が含まれています。公開されている動画には、「これは神楽舞である。神楽舞とは…邪気邪念を祓い清め、処理するところの胎動である」という説明があります。

「神楽舞の始めは『天の浮橋に立たして』という。水火のむすびであります。天の浮橋に立つことになる。五井先生（白光真宏会 開祖）のようなお方は、立てばそこが即ち天の浮橋であり、天の浮橋に立つことになる。しかし、ご修行の足らん人は、導かねばならないので、そのお導きのために形を一寸お見せします」（武産合氣 p.187）

「オーム、オーと引きのばされた言霊がひびき、杖をささげもった植芝先生のお体が二回、三回とまわります。いよいよ神楽舞が始まりました。神楽舞といっても、神社などでとり行われるたぐいの舞ではなく、杖の動き、お体の動きはそのまま合気のわざとなっています。『これが天の浮橋です。オの言霊とウの言霊（オーム、オー）です。これは日本では誰もやっていません。私はいつもやっています。これは物のはじまりであります』 植芝先生は説明を加えられながら、言霊とともに神楽舞の一つ一つの形を舞われていかれました」（武産合氣 pp.188-189）

開祖が、杖で天を搔き回すような仕草をされた後、お腹の前に杖を縦にして降ろされた時に宇宙と一体になられたと聞いています（写真3）。

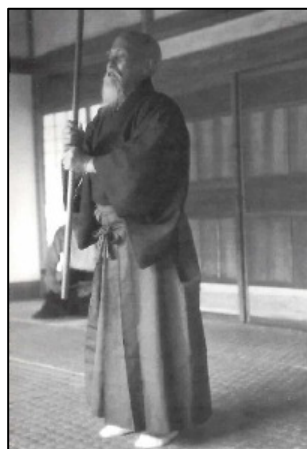


写真3 天神楽を舞う開祖

この時、「天の浮橋に立たされて『ア』は自（おの）ずから『メ』は巡る。浮橋の『ウ』は空水にして縦となす、橋の『ハ』は横となす。水火結んで縦横となす、縦横の神業。自然に起きる神技。（略）自然に起きる気。気はすべての大王である。（略）全部結ぶ。結ぶことを貫いて気の仕組みである。気の修行修錬は（略）力の大王ともなり、武道の大王ともなるのである」（武産合氣 p.151）ということですから、体（水、ミ、身）は正中線を垂直にし、心（火、ヒ、霊）はゆったりと大橋の上から眺めるような気持ちで、自分と相手を含む宇宙に充満している真空の気と一体になっている（全部むすぶ）とイメージされていたと思います。

11) 天の浮橋に立つための心の鍛練

気の鍛練法で触れたように脳波で観測されるということは、これは脳の働きです。私たちは、それを心の働きと捉えています。有田教授は、「心は、どこにあるのでしょうか。心は大脳辺縁系と大脳の前頭前野にあります。脳の研究者である私としては、そうこたえるしかありません。大脳辺縁系には原始的な感情を司る中枢があります。また、人間には原始的な感情をコントロールして高度な幸福を得る機能があります。それを司るのが前頭前野です」（「セロトニン脳」健康法）と説明しています。心は脳にあるので、心の動きが脳波に表れるのです。

心の働きは知・情・意に分けられますが、脳波に深い関わりがあるのは情（感情）で、「心の基本は感情です。『つらい』『苦しい』あるいは『楽しい』『幸福だ』」。私たちは毎日そういう心の動きにそって暮らしています」と言われるとおりで。ただ、私たちの認識としては、情を司っている心は腹にあって、「腹が立つ」「腹の底から笑う」などという言葉になっていると思います。英語の場合の情を表す言葉は“heart”なので、英語圏の人が“heart”と言う時には胸を考えているのではないかと思います。この心（感情）をコントロールするときには、腹（臍又は臍下丹田）を意識することになると思います。

スポーツドクターの辻秀一医師が、『ゾーンに入る技術』という本を出されているので引用します。副題は『「驚異の集中力」が最高の能力を引き出す！』です。

「ゾーン」とは、究極の集中状態になり、スポーツや仕事などで最高のパフォーマンスを発揮出来る状況で、さらには、能力以上の力を出せる状況のことです。人間の気が散るという習性を改善し、常に集中状態を作り出すために、脳の認知機能（敵から身を守るために外の環境に敏感になる能力で、周囲のことが気になってしまう習性）とライフスキル機能のバランスを整える方法が書かれています。ライフスキルとは、心を「揺らぐ」「とらわれず」のフロー状態に導く機能のことで、このフロー状態は、別の表現をすれば、本気状態とか無我夢中の状態ということで、理由や条件などに頼ることのない恒常的な安定したエネルギーの自家発電状態（心理学では内発的動機の状態）です。フロー状態が進めば、ゾーンに入り、野球でいえば、投手の球が止まって見えるとか、小さい野球ボールがバレーボールほどの大きさに見えるなどの現象が起こります。

集中状態になるためには「何をするのか」が明確で、かつ、それが人からやらされている状態ではなく、自発的な楽しさに満ちあふれた挑戦に満ちた精神状態で行うことが必要とされていて、成る程と納得出来ます。試合中にミスした選手にコーチが「絶対にミスするなよ！」と注意を与えると、それが「とらわれ」として残り、次のプレイでもミスをしてしまうというのは、ノンフロー状態になってしまうからだそうです。褒めて育てるということは、この意味でも大切だと思います。

将棋の羽生名人や野球のイチロー選手が、集中状態を常に作り出している「集中脳」の持ち主として紹介されていて、名人やトップアスリートのような「集中脳」を磨くための3原則が示されています。その第1は、ライフスキル脳の仕組みやライフスキルとはどんなものか、フローとはどんな状態なのかとか、なぜ人はノンフローになるのか、などの知識を持つこと、次に、その知識として得た脳の使い方を実践して、フロー状態になり、集

中を体感すること、最後に、その体感、即ちフローの感覚を言葉にして、人と分かち合うことだそうです。この3番目の原則は、体感したことを自分の言葉で表現出来ることだと思いますが、私たちもフロー状態を「呼吸力」や「察気」に置き換えてみると、それ（又はその概念）を言葉で伝えられるようにならない限り、その本質に至っていないことが分かると思います。

認知脳が働いている中で、ライフスキル脳が磨かれ自由自在に使える人、即ちいつでもどこでも集中出来る人をバイブレイン（Bibrain、2つの脳）な人と定義していて、「何をするのか」が明確で、それを限りなくフロー状態で行うことが出来る人で、そうすると集中状態になるそうです。そのために、自分の感情（気分、気持ち）に気づき、楽しい、安心、ゆったり、ワクワクなどのフロー状態をもたらす感情と、イライラ、残念、がっかり、やばいなどのノンフロー状態をもたらすものとを区別して、自己評価することがライフスキルを磨くことになるのだそうです。言いわけ（正当化）すると、自分の心の状態を自分ではなく、環境や経験や他人に任せることになるので、「自分の心は自分で決める、自分の機嫌は自分で取る」と決めることが重要で、これがライフスキル脳の原点になるとのことです。

心の状態をフローにする4大ツールは、「言葉」「態度」「表情」「思考」で、この4つを自分の心のために使うこと、即ち、人間固有のこの4大ツールを使うライフスキル脳で心の状態をマネジメントするとフロー化が起きるということになります。

まず、自分の口から出る言葉を選ぶというライフスキルを学ぶことで、自分の心をフロー化させる言葉を発するだけでなく、頭の中で唱える言葉も選択する必要があります。言葉の選択では、野球のイチロー選手が挙げられています。

「イチロー選手がインタビューにゆっくり答えているのは、みんなにどう思われるかではなく、自分の耳にどんな言葉を入れて心の状態をフローに保つのかということに集中している証だと思う」

「態度」は穏やかな態度、堂々とした態度、元気な態度で、外部に起こった状況や出来事とは関係なく、そのような態度を自分の心のために作る必要があります。その良い例が、国民栄誉賞を受けた野球の松井秀喜選手です。

「松井選手も毎日毎日、自分の成績をマスコミのインタビューで世界中の人に知らせなくてはいけない状況でストレスがないわけではない。それでも穏やかな態度でいるのは、ライフスキル脳のなせる技だ」

良い態度はリラックスしていることでもありますが、リラックスするために身体を使いながら行う腹式呼吸が推奨されています。

「実は、呼吸とフロー度合いの関連が高いということもわかっている。人は、ノンフローの時、呼吸が浅く、早くなる。そして、脳はそのように記憶しているから、浅く、早くなれば、今はノンフローなのだと思います。逆に呼吸をゆっくり大きくしてみるだけで、心はフロー状態の方へ傾く。呼吸を自分で意識し、フロー化の態度の1つとして大いに利用してほしい」

「私たちはリラックスすると、『とらわれ』が軽減される。これもフロー状態の1つだ。（略）リラックスすると俗に言う右脳の機能が良くなり、認知による『とらわれ』がなく

なって、創造性が高まると考えられる」

「表情」は、「笑顔」が外部の状況によって出て来たものでなく、外部の状況に支配されることなく、自分の心をフローに傾けるために笑顔でいるということなら素晴らしいことで、良い表情が、顔面の多くの筋肉が「その表情でいることがフローな状態であったことだ」と脳に思い起こさせ、心のフロー化を引き起こすようになるのだそうです。良い表情の持ち主として、ボギーでもバーディでも明るい笑顔を絶やさない、ゴルフの宮里藍選手が挙げられています。

最後に「思考」ですが、外部の状況にどんな意味付けをするかということではなく、こういう脳の使い方をすると理由や理屈に関係なく、人間の心はフロー状態に傾くのだという脳の使い方、即ち思考の選択をいいます。例えば、好きなことを考えると人は外部の状況に関係なく必ず気分が良くなるので、好きという感情を大事にすることが勧められています。職場などで、同じ人でも、悪いところを見ると、どんな人でも嫌いの感情がわき起こるが、悪いところがあっても、良いところを見ると、好きの感情が起りやすくなることは経験していることだと思います。外部の状況に左右されないフロー状態を作り出すために、思考のコントロールが欠かせないようです。「好きこそものの上手なれ」は、このようなことを説明する言葉かもしれません。

集中の習慣を身に付けるため、次のことが書かれています。

「自分で作れる『楽しい』をリストアップする。これをどれくらいしっかり持っているのかということこそが、いつでもどこでもフローを作り出すには大事になる」

開祖が、「本当の合気道はやって楽しいものでなければ、極意を得ることはむずかしいのです。この植芝は道楽者です。道楽というと。一般の人々はすぐに別の意味にとりますが、私の道楽とは、神の道を楽しむことを言っているのです」と述べられています。まさにこのことだと思います。オリンピックなどのために出発するトップアスリート達が「楽しんで来ます」とインタビューで答えているのは、「遊んできます」という意味ではないようです。

開祖は、地上天国建設を合気道の目的としておられます。これは、左脳で考える思考的、論理的なものではなく、脳の大脳辺縁系と前頭前野の感情と結びついたものであると思います。開祖の地上天国は、難しい理屈ではなく、神の国や極楽浄土を想うような楽しい気持ちそのものであったと思います。

12) おわりに

先達は、「『天の浮橋』とは植芝初代が晩年に到達した言霊学の秘境だが、要するに武術の鉄則である『先手必勝』を極点まできわめた間合いの心得と思えばよい。この位置にいれば相手には反撃の余地はない。つまりこっちが必ず勝つ。筆者は開祖に口伝の形で『天の浮橋』を伝えられた。間合いの心得だった」と述べられています。私が今まで述べてきたことが、開祖の口伝と少しなりとも合っていればよいと思います。自分では、この間合いを空間的なものに限定せず時間的なものにまで広げると、少しは当たっているかなと思

います。

開祖は、技を盗まれるのがいやで、「技を2回やると盗まれる」とか「演武は、技を盗まれるからわしは嫌いだ」とおっしゃられたという話が伝わっています。これを、そのままに受け取ることも大切だとは思いますが、そのために開祖が技を教えないでお話ばかりされていたと考えてしまうと、そこからは何も生まれてきません。

「すべて道はあるところまで先達に導かれますが、それから後は自分で開いてゆくものなのです」(合気神髄 p.182)という言葉も遺されています。熱心な稽古に加えて、開祖の合気道は神示(靈感)によらなければ体得も継承も出来ないと親切に諭されているように思います。

拙文をお読み下さった方は、私の解釈から離れて、もっと自由な発想をしていただいて結構です。自分自身の中でブレインストーミングをして、ああだろうかこうだろうかと考えている内にインスピレーションを受けると思います。合気道は宇宙の真理ですので、宇宙の真理のために自分が存在するのではなく、自分が存在するために宇宙の真理があるのだと思って真理の探究をされれば、人生に一つの目的が生まれます。

「世の中の人々は、宇宙の真理に明るくない人達が多い。(略)このようなことに気づいて、宇宙の生成化育への大道を歩もうとする者は、己れの心身統一をはかり、宇宙の魂を磨いて顕幽神三界を守り、天地和合の大道である合気道を律し、宇宙の真理の律法を明らかにしなければならぬ」(合気神髄 p.113)です。

宇宙の真理を明らかにするためには、まず「何が書いてあるのだろうか」と思って道文を読むことから始まります。そして、次に「そこにどのような真理・原則が述べられているのだろうか」と思って考え、調べましょう。更に「それを自分はどう受け止めるか、どう思うか」ということを自分に問いかけて、最後に「自分はそれをどう実践するか、技にどう表現するか」というところまで進めてみましょう。

「合気道で宇宙の魂を磨く者は、この源(宇宙の一元の神の働き、即ち万有愛護の働き)をよく究めて、宇宙の真理にかない、宇宙の御心にかなうように、万有愛護の心をもって、世の中の生きとし、生けるものに喜びを与えるように接しなければならぬ。このことは、やがて己に宇宙の喜びの大声に迎えられる日がくることなのである。この喜びは合気道を稽古するものの務めの一つを完遂することになる」(合気神髄 p.114)と、文章は続いています。

開祖は、私たちが「宇宙の喜びの大声に迎えられる日がくること」を願ってお話されていたと思いませんか。そう考えられるようになれば幸いです。

顔の筋肉を緩め、口角を引き上げて笑顔を作り、「宇宙の喜びの大声に迎えられる日がくること」を期待して、楽しい稽古を続けましょう。

そして、開祖の勧めに従って聖賢の書を読み、思索を重ね、少しずつ万有愛護という神のみ心に近づけるよう、稽古の徳を積み重ねたいと思います。これは、あまり目に見えない努力ですから。

「野外道場に立つは布斗麻邇の古事記をもって一緒にやることであり、世界の経緯はことごとくこの中に入っている。春夏秋冬も心の動き、気は力の本であるから、最初は十分に気を練っていただきたい。日本を創るのは自分自身、魂は自分自身で創るのであります」
(合気神髄 p.132)

最後までお読みいただいて有難うございます。

参考・引用文献

- 植芝吉祥丸監修『合気神髄』(平成2年1月)
植芝盛平口述、高橋英雄編著『武産合気』(昭和61年11月)
植芝盛平監修、植芝吉祥丸著『合気道』(昭和32年8月)
植芝吉祥丸著『合気道開祖 植芝盛平伝』(昭和52年9月)
『合気道新聞 CD-ROM』公益財団法人 合気会
『合気道探求』公益財団法人 合気会
森信三著『修身教授録』
砂泊誠秀著『合気道で悟る』
五月女貢著『伝承のともしび』
月刊秘伝編集部編『開祖の横顔』
『月刊武道』日本武道館
大石凝真素美著『大日本言霊』
『霊界物語』
大本教学研鑽社編『祝詞の解説』
吉田國太郎著『續 常樂への道』
有田秀穂・中川一郎共著『「セロトニン脳」健康法』
辻秀一著『ゾーンに入る技術』

附表1 用語索引及び同義語・関連語（参考）

	用語	合気神髄	武産合氣	同義語・関連語
あ	愛（大愛）	19、34、40、41、44、45、47、48、50、53、60、68、85、94、100、108、110、115、122、125、128、129、150、154、159、160、163、175、182、187、189、194	14、18、30、33、37、50、55、59、63、67、69、128、129、140、141、150、155、157、163、166、192	ス声（好く） 合気
	合気道の守護神		126	天の村雲九鬼 サムハラ竜王
	合気道は私の他にない	99		神示を受ける
	合気の起源	51（「期限」は間違い）、123		愛の働き
	合気の稽古	62、161		
	合気の根源（合気の根元）	19	152	宇宙の営みの元
	合気の根本の目的		111	地上天国建設
	合気の使命	73、150	140	万有愛護の使命
	合気の本質	87		
	合気の魂の円	121		
	合気の鍛錬（武道の鍛錬）	42	18	神業の鍛錬
	合気の原理（合気の理）	36、38	192	神人一体
	合気妙応（合気妙用。合気の妙用）	75、87	28	
	相手を制す	63		
	相手を包むような雄大な気持ち	97		天の浮橋
	相手を絶対に見ない（相手を見るのではない）	119	190	
	愛の現れ	35、41、43	69	
	愛の交流	152	37、48	
	愛の信念		57	信仰
	愛の念力（念力）	78、81	128	念彼観音力
	愛の働き（愛のみ働き。愛の御働き）	35、36、40、43、72	30、69	
	愛の結び	53		
	「合」は「愛」に通じる	41		
	阿吽の呼吸の理念	12		呼吸力

	力			
	青玉		136	真澄の玉
	赤玉、白玉、真澄の玉	22、51、129、149、190	124、136、164、182	
	頭のはたらきは両手にまかす	146		両手は頭の働きを代表
	あなないの道		57	武産合気
	天降りの第一歩	69		左足
	天津神なぎ(天造之神算木。天津神算木。天津かなぎ)	17、168、169	44、79	宇宙の真理を悟るために使用する神器合気道
	天の浮橋	26、27、28、50、65、66、69、71、72、73、79、90、92、93、99、118、128、151、153、188、193、194	29、38、48、61、67、72、73、74、98、102、133、134、140、141、152、153、154、157、163、174、175、183、187、188	水火の精台 水精火台 大橋 天台
	ありのまま	188		真理そのもの
	淡道之穂之狭別の行		89	武産合気
い	呼吸(いき。息)	84、92、97、100、101、134	132、156、157、181、182、183、184	
	生き通しの理(生通しの生命)	173	70	永遠の生命
	息の仕組み	100		
	息の誠	13		
	一元の神(一元の大神。一元の親神。一元の大御親。一元の創造主。一元の本)	12、14、17、30、38、117	43、51、54、56、59、77、80、81、82、97、100、102、126、137、148、149、150、157、160、176、177、179	
	一体化(一体)	43、100、172	62、70	無抵抗主義
	巖の御魂、瑞の御魂	130、155		
	巖、瑞	130、186		霊、体
	一霊	78、167、188	149、160、179	一元の神
	一霊四魂	20、56	53、90、161、179	
	一霊四魂三元八力	71、110、113、131、141、167	53、60、70、85、89、114、139、148、149、161、169、185、187	
	伊豆能売(「五つ」は誤り)の神の働き	112		
	五つの魂の緒の緒力		167	五伴緒の緒力
	五伴緒(いつとものお)の緒力		184	
	祈り		30、31、46、47、48、49、50、55、104、108、110、120、128、	

			133、136、142、144、147、168、169、175	
	入身転換の法	163、174		
	岩戸開き	89、92、140、143、149、166	162、169、183	体から光が出る こと
	引力	52、58、74、79、111、125、143	70、83、90、162、164、193	
	引力の練磨(引力の鍛錬)	101	32、155、190	八大引力：八力
う	受霊(うけひ)	74、79、145、190		結び
	宇宙建国完成(宇宙建国。宇宙天国建設)	124、126	28、31、34、46、49、128、148、160、176、182	地上天国建設 自己の完成 世界家族大和合 それぞれに処 を得させ
	宇宙森羅万象の活動と調和		13	
	宇宙組織の玉(魂)のひびき	27、37、39		
	宇宙と調和		14	神人合一
	宇宙と一つ		191	神人合一
	宇宙の運化(高天原の運化)	109	62	天の運化
	宇宙の気	57、91、92、112、145、152	18、32、77、88、113、135	
	宇宙の心	34、43		愛 万有愛護
	宇宙の根源(宇宙万有の根源)		35、86、120、127	気
	宇宙の仕組み	65、96、139		宇宙の真理
	宇宙の実体		36、70	宇宙の真理
	宇宙の使命	109		宇宙建国
	宇宙の条理(宇宙全体の条理。宇宙の条理の真象)	38、107、109、134	37	宇宙の真理
	宇宙の真象(大宇宙の真象)	13、17、61、107、108、160、165		宇宙の真理
	宇宙の神髄	178		宇宙の真理
	宇宙の真相(大御親の真相)	142、143	70	宇宙の真理
	宇宙の真理(宇宙真理。宇宙の理。宇宙の理道。宇宙の真相。宇宙の真理真相。宇宙の真理真相)	16、19、21、38、39、56、61、104、113、114、122、123、177、179、181	29、148	

	宇宙の姿		87	
	宇宙の魂 (宇宙魂)	60、109、113、114		
	宇宙の中心に帰一	37、115	192	神人合一
	宇宙の万世一系の理(宇宙万世一系の理道)		28、43	宇宙の真理
	宇宙の万有万神の真象	38、106		宇宙の真理
	宇宙のひびき(宇宙組織のひびき)	27、29、89、119、176		気
	宇宙の法則(宇宙の諸法則)	86、174、175、176		宇宙の真理
	宇宙の妙精(宇宙万有の妙精。大地の妙精)	61、104、128、149、175	45、62、64、72、116、117、134、164、168、182、195	気
	宇宙の律法	113		宇宙の真理
	宇宙万有の活動	177、178		
	宇宙みそぎの大道		28	合気道
え	永遠の生命		195	生き通し
	円外(力の及ばぬ円外)	171		
	円の中心	100		皆空の中心
	円の本義	121		
お	奥義	80、105、175	128、131	
	黄金体(白光体)		17、137	
	黄金の釜	50		
	黄金の気		17	
	大御親の真相	143		宇宙の真理
	小門(小戸)の神業	20、23、49、50、64、99、119、126、130、138、139、140、141、148、151、155、190、191、		禊の技
	淤能碁呂島(おのころしま)	39、69、79、92、131、145、151	32、88、113、135、147、184	地球
か	神楽舞		185、188、189	天神楽
	過去、現在、未来(過現未)	12、17、60、101、112、160、166、180	75、88、168	
	風の玉	22		真澄の玉
	形と形のものすれ合い	129、154		魄の武 実相武
	形のない世界で和合	51		

	形より離れたる自在の気なる魂	130		
	火水 (かみ)、水火 (いき)	20、56、57、87、131、141	100、116、148、176	
	神の愛 (大神の愛)	40	17、18、67	万有愛護
	神の武		55	合気道
	神の法則		57	宇宙の真理
	神技 (神業)	70、106、151、178	29、31	
	神ながら (かんながら、惟神)	91、130、184、190		宇宙の真理のまま
き	気	14、19、22、28、32、39、40、52、53、62、65、74、89、99、95、105、106、110、117、118、126、127、128、129、131、132、134、140、146、147、148、151、152、159、164、172、176、177、178、190	32、64、70、82、88、86、119、121、123、133、145、151、154、161、168、171、177、179	力の本 一切を支配する源、本
	気育、知育、徳育、体育、常識の涵養	24、37、88、99、101、140		天の浮橋に立つ
	帰一表現の原理 (帰一表現)	36、43		我即宇宙
	帰一和合		29	神人合一
	気形の稽古 (気形)	161、162		
	気魂力	53		呼吸力
	気締め	70		
	気・心・体の妙用	158		神人合一
	気体と気体	149、160	101、105、112、119、156、164	魂の気、魄の気 精神科学、物質科学
	気と気の交流	152		結び
	気の生み出し	118		
	気の運化	53、123		
	気の置きどころ	67		意識する場所
	気の稽古		145	気形の稽古
	気の交流	152	57	
	気の仕組	49、88、94、151、191		
	気の整頓	89		
	気の世界		119	
	気の流れ	131	122	
	気の働き		32	
	気の妙用	85、86、105、158、176、178		言霊の妙用
	気の技 (気のみわざ)	92、190		武産合気
	気は力の本	132		

	気ばかり	101		
	気結び、生結び、緒結び	12、53、68、73、79、86、88、93、104、105、120、121、131、167、168、175、176、189、194	60、72、134、157	結び
	凝体身魂	104、168、175		人間
	気、流、柔、剛	71	29、30、32、44、148、161、167、179	三元
	きりり、きりっ	94、154、172		皆空の中心
	気を押さえる	159		
	気を使っていたきたい	132		
	気を練る	159		
く	空気の素	51		真澄の玉 空の気
	空気を媒介	101		
	草薙の神剣（草薙剣。天之村雲の剣）	19、91、127、145、159	136	合気道の技
	くさなぎの発動（草薙の神剣の発動。草薙の神剣の發揮。草薙剣の神剣発動。神剣発動）	19、91、130、149、155	38、91、146	
	奇魂、荒魂、和魂、幸魂	74、143、155、188	36、37、51、58、78、88、90、149、160	四魂
け	経綸	13、42、47、72、73、108、111、114、127、147、149、167	28、62、68、72、73、89、90、115、160、176、196	仕組み
	顕界、幽界、神界（顕幽神の三界）	15、25、26、30、44、50、64、85、91、107、112、113、121、138、139、142、147、153、166、175、181	31、33、49、71、76、83、88、105、109、165、182、184、187	
	顕斎、幽斎	126	105、106	
こ	呼吸	12、52、57、60、85、87、86、95、98、110、111、112、123、134、147、160、170、175	50、51、60、62、64、88、98、102、104、117、123、124、134、138、156、157、165、177、178	
	呼吸の理念力	12		呼吸力
	極意	34、57、121、129、154、178、189	13、135	
	御経綸の武	73		合気道
	心をむすぶ	159		
	言霊	27、29、51、53、57、62、72、74、75、89、111、122、132、133、145、168、169、188、194	32、33、35、36、42、44、60、74、78、79、80、85、86、87、89、115、116、117、149、187、188	
	ことたまの呼吸		46	
	言霊の妙用（言霊の大妙用）	92、108、113、122、142、180	28、31、36、79、89、124、136、153、159、182	気の妙用

	金剛不壊の珠	57、89		真澄の玉
	魂と魄の二つの岩戸開き(魂と魄の岩戸開き)	88		二度目の岩戸開き
	魂の円	121		
	魂の気(魂気)、魄の気	18、22、28、29、145、146、170、181		魂の気：宇宙組織の気、造り主
	魂の世界、魄の世界	13		
	魂(こん)の比礼振り(魂の霊出。気魂のひれぶり)	26、27、45、70、92、106、107、108、149、190	48、62、67、127、134、135、145、163、165、170	結び
	魂、魄(魂魄)	13、18、51、62、88、91、92、96、102、120、121、122、128、131、140、144、147、149、150、160	48、49、50、51、54、59、61、67、75、81、83、84、97、127、129、135、149、153、155、159、162、164、165、169、170、172、173、174、181、182、183	魂：霊 魄：物の霊
さ	悟る(悟り)	98、164、165	124	
	三角法	22、146、172	53	
	三元	56、74、76、78、113、167、181	53、89、161、179	剛、柔、流 宇宙全体の姿
し	塩盈珠、塩涸珠(潮満つ玉、潮干る玉。満涸の珠。盈涸の珠)	19、22、57、100、129、169	44、82、124、136、146、164、187	赤玉、白玉
	色心		49	体と心
	識心		30、78	
	自己の完成(自己を完成。人の完成。自己の心から立て直す。自己の心を直す。自己の魂磨き)	149、150	49、68、70、81、193	
	四魂	19、74	36、51、60、139、148、160	奇魂など
	至大天球	112	87、94	高天原
	自分の心に相手を包む	97		天の浮橋に立つ
	島生み、神生み(神生み、島生み)	23、68、152	44、57、110、113、115、124、170	天の浮橋に立つ
	宗教	115、165、182	36、45、48、131、139、192	
	修理固成	50、52、64、65、66、75、88、101、125、126、134、135、146、153	39、78、94、107、122	神業
	松、竹、梅(松竹梅)	21、22、23、65、129、135、140、191	132	
	白い光の玉(白い光	14	82、130、131	

	りものの玉。幽体)			
	真空の気、空の気	67、68、79、81、86、95、119、123	40、46、90、123、155、157、162、181	真空の気：宇宙の万物を生み出す根元、魂の気 空の気：物の気、魄の気
	神気	90		
	信仰の徳（信仰の力）		45、55、60、64、65、66、67、158、184	
	神示（神旨）	112	48、56、88、129、130、134、183	
	心識	73		魂、靈性
	真人（真の人）	20、37、56、72、139	141、156、157、159、171	
	神人一体	36、42		神人合一
	心身一如（心身統一。心身の統一。宇宙身心一致。身心統一。身心一致。精神統一。精神の統一）	29、86、99、104、106、113、170、174、175、176、181		神人合一
	神人合一（神人和合）	42、43、52、56、84、124、159		
	真善美	20、56、110	103	
	神通千変万化の技（千変万化の技。神変自在の技。自由自在の技）	108、176	46、90、123、125	武産合気の技
	信念の行		157	
	信念むすび		72、159	
	真の合気道（真の合気）	20、98、99、161	50、109、149	
	真の信仰		65、66	
	真の武産	115	14、192	合気道
	真の武道（真の武術。真の武。真武）	35、115、118、128、150、154、162、173、182	18、30、43、44、69、77、91、122、166、173、190、192	合気道
	真理の力	179		呼吸力
	神霊元子	71、74	75	言霊元子
す	水火の息		50	
	水火の根源		53	
	水火の仕組	141		
	水火の精台（水精火台）	77	44、78	天の浮橋
	水火の妙体	170、181		天の浮橋

	水火 (すいか) のむすび	50、87、89、99	34、43、50、54、187	天の浮橋
	ス声 (すのみ声)	45、111	35、43、61、86、95、118	
	「ス」の凝結 (「ス」の現われ)	21、50、99		
	「ス」の言霊 (「ス」の一字。「ス」の御息)	50、99、110、181		
	澄み切った玉	14	82	真澄の玉
	すみきり (常在)	111		常立、常住
せ	精神科学 (霊科学。宗教科学)、物質科学	20、61、117、119、160、172	58、73、74、75、76、116、158	
	精神の引力の働き	15	83	引力の練磨
	精神武道		36	気の武道 靈武
	生成化育 (宇宙生成化育)	12、17、60、78、104、113、114、117、120、141、142、143、150、175、176、180	31、39、50、58、69、74、76、166	
	絶対不敗	35	14	
そ	造化器官 (造化機関)	46、59	48、54、67、77、87、97、120	
	想念の世界		67	
	即位づけ	164 (「即ち位づけ」は間違い)		続飯 (そくい) づけ
た	大虚空の中心	154		皆空の中心
	体主靈従	66		
	対照力	119	92、93、174、175	八大引力
	体三面	89		
	高天原 (タカアマハラ)	74、111、112	32、59、62、65、68、70、72、77、87、92、93、94、98、117、118、120、149、175、187	大宇宙
	武産	40、70、78、95、121	32、50、89、124、155	
	武産合気 (武産の合気。武産の合気道)	27、65、69、70、73、85、115、122、124、129、142、143、175	28、43、49、53、54、55、57、58、59、60、63、89、90、99、122、123、130、134、146、154、156、162、173、179、181、182、183、192、195	「さむはら」とも読む
	武産合気の守護神	65		
	武産の根源 (武産合気の根源)		115、126	
	武産の根源の現れ (武産の現れ)		31、126	
	武産の武	12、41、86、87		合気道
	魂 (たましい)	12、16、26、29、58、59、60、62、85、89、92、95、100、101、120、124、125、127、	50、64、76、77、100、110、136、140、144、150、152、157、166、167、168、174、	

		129、132、139、141、142、148、154、159、166、167、168、176、190	177、178、184	
	魂線 (たましい)	73、74、75、143、168	60、79、98、145、149	玉の緒
	魂の現われ	43		
	魂の糸筋の結び(魂の糸筋、霊の糸筋)	84、100、101、146	178、183、184	
	魂の円	121		
	魂の力	102		
	魂(玉)のひびき	27、37、38、39、88		
	魂の学び	12、17、18、22、49、141		
	魂の養成(魂の錬成。魂の錬磨)	65、101	66、166	
	魂の技	12		
	玉の緒(魂の緒。珠の緒)	73、84、96、139、192	41、48、49、60、64、78、79、80、134、139、184	
ち	地祇(ちぎ)、地場(じば)、磐境(いわさか)、神籬(ひもろぎ)	56、91	59、61、62、117、122、153、155、168、170、171、172	魄の土台、魂が働く土台
	地上天国建設(地上天国)	20、142	33、34、49、68、80、111、162、171、186、195	合気道の目的
	千引きの石(千引ノ岩)	136	108	お互いの誠、産屋、岩間の道場
	紐線	47、84		
	紐帯	84		
	直接内流、間接内流		57	神示の受け方
	鎮魂帰神(鎮魂、帰神)	16、89、101、125、168	29、64、84、106	瞑目静座
て	手によってなされる	98		
	掌に握るごとく	121		
	天火結水地	114、143		アイウエオ
	天火水地(てんかすいち、天地火水、あめつちひみず、水火天地)	20、56、98、169、192	36、37、41、44、51、58、90、150	
	天授の真理	40	28	宇宙の真理
	天台	14	50、81	天の浮橋
	天地国土完成	142		地上天国建設
	天地自然の法則	161		宇宙の真理
	天地の気	172		宇宙の気
	天地の条理	85		宇宙の真理

	天地の真象	164		宇宙の真理
	天地の真理	84、181		宇宙の真理
	天地の道理	170		宇宙の真理
	天地の理(天地日月の気)	57	123	宇宙の真理
	天地剖判(宇宙剖判)	51、122		
	天の運化(天地の運化。天の運行)	12、23、60、61、188、114、117、149、158、160、167、176、179、180、185	43、62、63、110、116、164	
	天の規則	162		宇宙の真理
	天の呼吸、地の呼吸(天地の呼吸。天の息、地の息。天地の息)	14、19、62、97、149	43、44、45、46、82、133、134、136、146、164、181	
	天の気、地の気(天地の気。天と地の気、	172	133	
と	同化	12、14、34、37、41、71、87、105、109、126、175、176、179	29、30、72、97、109、145、157、164、168	
	同根、一体(同根一体)	12、73、79		天地同根万物一体、我即宇宙
	導即剣(導即倒?)	63		剣：合気道
	東天を拝する(東天を拝し。東天に向けて礼拝する)	167	50、64、137、153	
	独自の道	41		
	鳥船、振魂	101		
な	直毘(直日。神直日)	50	171	一霊
	七十五声(七十五のみ声。七十五の言霊)	112、131、180、181	91、163、184	
に	日月の気(日月の息。日月の呼吸)	14	46、82、124、146	
	二度目の岩戸開き	149、190、194	153、155、156、165、167、170、173、183	体から光が出る
	如意宝珠	57		八光の珠
ね	念	80、104、105、174、175、176		
	念の研磨	105、176		念を研ぎ澄ます
	念彼観音力	81、119、129、159	48、67、128	愛の念力
	念力の大橋		134	天の浮橋
は	魄の土台(魄を土		155、172、173、181	

	台。魄たる土台)			
	八大引力(八大力の 引力。八つの引力。 八力の引力)	79、112、143	78、88	対照力
	八大力	118、192		八力、対照力
	八力(八の力)	56、74、131、167	32、53、78、88、90、161、 169、179	対照力
	八光の珠	57、166		真澄の玉
	発兆	66、87、104、168、169、174、 175、176		
	波動	74、86		
	万古不易の真理	84		宇宙の真理
	万有愛護	17、38、51、60、106、114、 117、123	17、55、80、91、140、181	神の愛
	万有の処理(処理の 道。処理の方法。霊 界の処理法)	129	28、38、186	無抵抗主義
	万有万神の条理(万 有の条理)	12、16、17、24、38、61、106、 112、116、142、151、160	31、38、88	宇宙の真理
	万有万神の真象	106		宇宙の真理
	万有万神の定理		172、182	宇宙の真理
	万有万神の道筋		64	宇宙の真理
	万有万神の律法	123		宇宙の真理
ひ	光ある妙技	17、61		
	光一元の世界		35	無
	光に同化	14		
	光、熱、力	14、20、45、52、53、57、68、 69、71、73、74、77、86、89、 90、127、143、161、166、168、 170、176、191	30、31、35、38、41、46、47、 55、56、63、67、82、85、101、 103、106、119、131、136、 140、142、145、154、157、 168、172、173、174、175、 177、178	
	光る合気	68		
	響き(ひびき)	12、17、27、29、51、61、84、 87、118、119、127、147、175、 176	13、51、57、85、145、178、 183	
ふ	武道の根源(武の根 源)	121、160	17	
	布斗麻邇(フトマ ニ)	64、132、153、193	46、54、61、105、122	宇宙の真理
	武の気の内流	57		
	武の神髄	95		
	武の本義	73、96		
	分霊分身(分身分 霊)	113	193	
ほ	奉仕の道		48	

	ポチ (ゝ)	110、131	86、117	一元の神
ま	正勝、吾勝、勝速日	12、20、21、34、35、38、65、68、70、90、91、106、158、159、167、169、176、193	31、37、41、110、171、191	武産合気
	摩擦連行作用(摩擦作用)	77、87	44、77	水火の結び
	真澄の鏡	57		心
	マツルギの道(まつるぎの意義)		43、63	
み	稜威(御稜威。みいつ。みいづ。ごみいず)	74、135、143、149	37、38、47、54、103、122、137、164、167、169、170、193	
	未完の宗教を完成へと導く	115	192	
	みすまるの玉(五ほつ御統の玉)	78、168		魂の気、魄の気
	禊(みそぎ)	19、22、23、24、40、49、50、80、81、90、91、92、93、95、115、122、126、136、137、138、139、141、142、144、145、148、149、150、151、152	28、31、33、38、39、49、58、61、64、67、100、101、106、107、110、113、123、124、126、132、136、143、148、157、162、164、165、167、175、182、183	宇宙の真相に疎き故にみそぐ
	禊の技(禊技)	38、49、92、130、141、142、155、190、193	64、99、107、135、139、140	小門の神業
	三つの鍛練	177、178		
	皆空	53、80、120、121		
	皆空の気	80		
	皆空の中心	80		天の浮橋 大虚空の中心
	妙精	58	33、46、102、113、134、148、160、182	精気
	妙精吸収(妙精を吸収)	128、175	62、64、72、168、195	
む	無	131	29、35、116、117	光一元の世界
	無我の境	98		
	無形の真理	154		
	無色無形	142		
	産霊(結び。むすび)	19、28、30、37、68、79、80、81、87、135	40、44、179、184	
	無抵抗主義	129、158、159	13	一体
め	目にみえざる世界	154	177	魂
	目を見てはいけない、剣を見てはいけない、相手を見てはいけない(手を見てはいけない、見る必要はありません)	27、154	190	

も	目的		49	
	目標	159	66、104、105、128、194	
	物の霊	88、144		魄
	モチロ（もちろ）	69、89、194		△○□、森羅万象の表象
	桃の実	23、65、13、143、168	42、66	
や	八尋殿	69	61、105	至誠殿
	大和魂（大和の魂）	23、30、97、98、129、136、190	31、174	
	山彦の道	45、182、188、189、192	135	
ゆ	融通無碍	12、108	125	
	勇、智、仁	31、98		
	指一本	171		
よ	四元	71		気流柔剛ウの働き
ら	螺旋	77、87	44	
り	両手は頭の働きを代表	94		
	臨機応変、自由自在の技	108		
れ	霊界	128、153	66、86、115、147、148、177、178	
	霊界の処理法	129		無抵抗主義 万有の処理
	霊体統一（霊体の統一）	62、172		神人合一 心身一如
	霊波のひびき		135	波動
	霊武、実相武	166		魂の武、魄の武 霊武は精神武道
ろ	六根（六根清浄）	16、44、45、96、107	38、39、45、76、105、153、16、173	
	六魂	19	97、98、161	
わ	分霊（分け御霊）	127、113	89、193	人間
	和合	12、24、25、30、36、37、41、42、43、47、50、53、69、84、85、91、99、107、109、113、115、121、122、124、142、144、153、154、160、163、173、179、180、194	13、28、30、31、39、46、49、50、58、59、62、74、85、91、109、128、154、174、175、183、187、192、194	
	和と統一	28、29、37、39、42、43、44、89、94、123、139、140		
	我即宇宙（我は即ち宇宙。宇宙即我。大宇宙と己れは同じ）	34、46	13、35、36	神人合一

見落としや間違いがあります。気付かれたらお知らせ下さい。